

トラック、戦車が侵攻する、そんなおり乳飲み子が母親に乳をねだる。「敵に見つかる、泣かすな、なんとかせい」と乳のみの子の母に制する声。子を見ればグツタリ。

二、三人で部落にはいって行く。何発か銃声がした。

行ったら彼らは帰ってこない。夜日をついで、このようなことのくり返して、木の根元には子どもが置かれていたりした。地獄絵の中をくぐり、青山、林口を横目に見て、二道河子でソ連軍に武装解除された。牡丹江を通り、梅林で婦女子、子どもと分けられ収容され、しばらくして拉古の収容所に移された。たべ物は、あき缶に米、高粱の粥ともご飯ともつかないものをスプーンで分けて空腹をいやした。

二十年の九月末日、貨車に立ちづめ、身動きのできない状態で十月二日、新香坊の駅に降ろされ、ハルビンの街に行き、日本人会のお世話になる。銭湯に入れて貰ったことが今なお、脳裏に残っている。ハルビンでは寒く、少しでも南下したいと考え、新京に行く列車にまぎれこみ南下した。新京では人びとの好意で一冬なんとか越し、昭和二十一年十月やはり学歴(学問)を思い、夜間

学校に行くことにして、給仕のようなことから始まった。

長男の死、長女今もカリエスの身

鳥取県 森原敏直

満州事変当時、国策の一環として、満州国建国の一翼をになうことは、男子の使命であり、本懐でもあった。

私もその一人として、昭和八年十二月、現地除隊するやただちに、あこがれの満州国政府に奉職したその頃、満州国は順風満帆の勢だったが、大東亜戦争に突入してより、情勢必ずしも順調ではなく、特に昭和二十年に入るや、戦況もいよいよ緊迫し、世相はにわかに騒然としてきた。はたせるかな。八月八日頃から、軍をはじめ、有力団体家族が、先をきそって疎開するにいたった。

満州国政府も急きよ、非戦闘員で希望する者を安全地区に疎開させることに決し、各都ごとに団体を編成し、八月十一日から新京を離れたのである。

私は經濟部団体の引率を命ぜられ、無蓋貨車で一同とともに安奉線を南下中、八月十五日、かの重大放送を安東駅ホームで聞き、そのまま、市内の紅屋旅館に民宿することになった。われわれ疎開者は、その家族構成、所持金等に差があり、家計もいちようではないので、疎開が長期にわたる見とおしとなったこのさい、おたがい家庭経済をひきしめ、協力して対応することにした。特に共同炊事は集団生活の基盤であり、これを持続するには、炊事のまかない費等をいかに調達するかが鍵であって、最も苦慮したところである。

疎開者には売食いできる荷物を持たない。けっきよく元手がいらす、だれにもできる、日本人相手の豆腐の小売りを始めた。はじめ同業者がなく、予想外に繁盛したが、しだいに同業者がふえ、売上げ漸減ばかりか、売残りの処分に苦心した。しかし、残品をアゲに加工し、夕方再び行商することで問題は解決できたが、好事魔多しとか、商を終って宿舎に急ぐ途中、待ちふせた暴漢に財布もろとも、器材まで強奪されることもあって、丸腰で無力の無念さに涙したことも再三あった。さらに残念な

ことは、八路军が、男子は勞工、女子は看護要員として徴用したが、仕事の終わった約束の日になっても解除されない者、強制的に延期されて遂にかえらぬ者もあって、日僑と軍との公約が一方的に破棄された。また、不幸にして、病気になった乳幼児や病弱者が、ほとんど、なんの治療も投薬も受けることなく、異国の山野に淋しく埋葬されたことである。

私も疎開中、長男を麻疹で失い、長女は引揚げの途次、栄養失調と難行軍のため、カリエスに冒され、今なお、後遺症のため体の不自由をかこっている。

こうした困窮のどん底にあって、ひたすら、引揚げを待ちこがれるうち、ようやく、昭和二十一年七月、正式に引揚げが実現した。

ここに、約一年三か月に及ぶ經濟部一団の集団疎開は自然解散となり、思い出深い安東を後にコロ島を経由し、なつかしい故国にぶじ帰還できた。